

成立する「観想」であり、これが人間にとって可能であるとされる根拠は、信仰の中に求められているのである。

究極の幸福と途上の幸福という二つの目的が区別されることに対応して、二つの目的のそれぞれに到達する手立てについても区別が設けられる。『神学大全』において最初に神に関する真理が、自然理性によって到達可能な範囲の中にある真理と外にある真理という二種類に区別されていることも周知の通りである。トマスはさらに同書第1部第79問第4項において、「アリストテレスのいう能動知性は人間に内属する何かである」という解釈を提示すると同時に、人間に内属する能動知性とは別の、離在的な能動知性が存在しなければならないという見解を示して、「われわれの信仰の教えによれば、この離在的な知性は神自身にはかならない。神は魂の造り主であり、魂はこの神においてのみ至福を得る」と言うにいたっている。

これによればトマスの哲学に「考察の範囲の拡大」をもたらしているのは信仰なのである。しかしそのためにトマスとアリストテレスの間に、考察の範囲の違いがもたらされたにしても、それは前者が後者の哲学を否定するという関係ではない。またそのためにプロクロスを取ってアリストテレスを捨てたことになるわけでもない。考察の範囲の違いはトマスと新プラトン主義の間にもあると思われるからである。そのかぎりにおいて新プラトン主義の第一原因の思想がトマスの考え方と「根本的に共通」であると見ることの妥当性についても疑問が残ると言わなければならないのである。

\* \* \*

## 討論報告（司会者）

大鹿 一正

本討論は、岡崎文明氏の「トマス・アキノナスの第一原因について」という研究発表を題材として目論まれ、水田英実氏をコメンテーターとして執行された。岡崎氏の研究は、同氏の積年の研究の成果たる新プラトン主義の理論に基づいてトマスの思想体系、特にその第一原因の理解、解釈を深めんとするものである。氏は第一原因の原因性を問題として目的因としての性格と作出因としての性格を析出し、トマスの第一原因の説には「目的因優位」の思想と「作出因優位」の思想との二つの立場が見られることを示し、「目的因優位」の思想は主としてアリストテレスが『自然学』におい

て展開している論理を踏襲したものであり、「作出因優位」の思想はディオニシウスの『神名論』、プロクロスの『神学綱要』、その影響下にある『原因論』に呈示されている思想に類似することを克明に指摘される。更に氏は、これら両思想の背景として前者は「世界の永遠性」を、後者は「世界の非存在」を前提としてはじめて考えられるものなることを示し、これまたそれぞれにアリストテレスの自然観と新プラトン主義の世界観に対応することを確認する。かくして、結論的には、トマスはアリストテレス的な目的因としての第一原因よりも新プラトン主義的な作出因としての第一原因をより先なるものとして採用したのが認められるところから、従って、哲学的な解釈において、トマスの第一原因の思想には新プラトン主義の影響があったと主張しうるのではないかと結論される。

これに対して水田氏のコメントは、先づ岡崎氏の研究の主旨を、トマスは第一原因の性格に関して、アリストテレス的な目的因優位の立場を捨てて新プラトン主義的な作出因優位の立場に立ったという主張として受けとめ、それに対するコメントを展開される。先づ、岡崎氏は、目的因優位の思想はトマスの最初期の著作『自然の原理について』において既に見られ、その論理は後に『自然学註解』に詳説されるものと同じであり、かくてトマスは青年時代にアリストテレスの哲学、自然観に通じていたと指摘されるのに対して、同じくトマス最初期の『有と本質について』の中には『原因論』の引用が見られ、トマスはアリストテレスと同様『原因論』ひいてはそれを通じての新プラトン主義の思想にも青年時代から通じていたというべきではないかと指摘される。蛇足を加うれば、その箇所の引用のトマスの解釈は後に『原因論註解』において詳述されるものと一致するものなるところから、トマスは青年時代に既にアリストテレスとともに『原因論』についても円熟期と同じな理解をもっていたという主張は認められよう。次に水田氏は「作出因優位」の論理について、「目的因優位」の論理は充分説得的であるのに対して「作出因優位」の論理は証明力が弱くディオニシウスの『神名論』の引用に見られるごとく、むしろ権威によるものが主であって、所謂「哲学的解釈」のみにては第一原因の作出因としての性格を導出することはできないのではないかという点が指摘される。

ここから、これが水田氏の主張のようであるが、「世界の永遠性」というアリストテレス自然学の立場から、全世界の作出、創造者としての第一原因への「考察の範囲の拡大」は、一に「信仰」に基づくものであって、アリストテレスから新プラトン主

義へといった哲学的立場によって説明できるものではないと結論される。

発表者とコメンテーターによって、トマス思想体系の解釈において誰しもが引き受けているずっしりと重い問題が呈示されて全会員にその解答を迫ったのであるが、会場の討論は直載に解答の決定を求めるよりはむしろその前提としての発表者、コメンテーター両者おのおのの解釈の用語の解明、立場の確認の方向に集まり、討論会というよりは仲間うちの研究会といった様相であった。侃侃諤諤の論争はもとより望ましいものであるが、このような静かな対話というものもなかなかよきものではないかというのが司会者の感想であり、かくて、有意義な討論会であったと報告したい。